今週の
倫理

2月のテーマ　|　病は赤信号

2026. 2. 14～2. 20

1477号

突然の病気の判明が恩意識を深める契機となった

自動車販売店を営むS氏は、五十八歳だった平成二十五年十一月、血尿が出たため病院で検査を受けると腎臓に癌が見つかりました。「処置をしなければ余命は半年」と告げられ、手術を受けることになりました。

手術の日が近づくにつれて、S氏の恐怖は大きくなっていきました。夜になると、〈死ぬのではないか〉、〈目が覚めないのではないか〉という不安が押し寄せ、体が震えて眠れない日々が続きました。恐怖を少しでも打ち消そうと、S氏は『万人幸福の栞』（以下、『栞』）を毎日読むことを決め、内容をノートに書き写すようになりました。

第八条「明朗愛和」からは、心を明るく保つことの大切さを感じ、励まされました。また、第十二条「捨我得全」を読み、「このような状況だからこそ全てを捨てる」という覚悟が決まりました。第七条「疾病信号」を読んだ時には、癌もまた自分を構成する肉体の細胞の一つだと気づかされました。

このように、自分自身の心と照らし合わせながら読み進めていくと、何度も読んで理解していたつもりだった『栞』の文言が、新鮮に心に響くようになりました。

そして読み続けるうちに、それまでS氏の心を支配していた恐怖や不安は消え去り、自然と眠れるようになっていったのでした。

中でも最も大きかった変化は、自分の命は周囲の支えによってあるという恩意識が深まったことでした。入院中は、家族や従業員、倫理法人会の仲間が度々お見舞いに訪れ、S氏を励ましてくれていました。

さらに、病気をきっかけに自分の肉体と向き合うようになると、生んでくれた両親への感謝も一段と深まったと言います。第十三条「反始慎終」にある「大衆の重畳堆積幾百千乗の恩の中に生きているのが私である」という文言が、本当の意味で腑に落ちたのでした。

その後のS氏は無事に手術が成功し、余命半年と告げられていたにも関わらず、十二年経った現在も健やかに生活しています。

S氏の癌は完治したわけではありません。それでも〈癌は大切なことに気づかせてくれる尊いものだから、嫌がるのではなく共存する心が大切〉と受け止め、病と共に歩む思いで仕事に励んでいるといいます。

人は、周囲の人や物や環境が当たり前のように目の前にあると、その有難さを忘れてしまいがちです。病気をはじめとする苦難は、その有難さを教えてくれる尊い存在だと言えるでしょう。

倫理研究所の創設者・丸山敏雄は『栞』の中で、病気になった時に心を正す必要性を次のように記しています。

病気は実は、困ったもの、人生の苦しみなどではなくて、有難い自然の注意、天の与えた赤信号であるから、喜んでうけて、間違いを直すべきである。

でないと、折角なった病気を、ただそれだけとして直しては惜しい、勿体ない。

病気を嫌がるのではなく、何かを知らせてくれる信号であると捉え、自己向上につなげたいものです。

え・城谷俊也